

## 教育と学問の問題：看護の学を中心にして

高田，熱美

<https://doi.org/10.15017/78>

---

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要．4，pp.1-10，1977-03-25．九州大学医療技術短期大学部  
バージョン：  
権利関係：

# 教育と学問の問題

—— 看護の学を中心にして ——

高 田 熱 美

Problem in Education and Learning

—— With Special Reference to Nursing Science ——

Atsumi Takada

## はじめに

学問研究という人間の営みは、理性のたえざる不屈の営みであって、それは、人間であることのひとつの証である。それだからこそ学問は、日常現実から離れていながら、なお現実に対して権威と影響力を有していたのである。しかしながら、「時代が大きい転換期を示すときには、去りつつある時代の権威の底にある学者・学問が、概して時代の主導力を失う……」<sup>1)</sup>といわれる。現在もそうであろうか。学問は確かにその生氣ある輝きを失ってきたように思われる。「何のための学問」<sup>2)</sup>という問いが発せられたりもするのはそのためではあるまいか。もしそうであるとすれば、それは望ましいことではあるまい。学問の権威が失われるということは、教育と研究が依って立つ理念が崩壊することでもあるからだ。

ところで、現在の学問が主たる方法としているものは科学の方法である。この方法は、自然科学の方法を移調したもので、それが実験と数学による検証にあることはいうまでもない。とりわけ、この方法は、Newtonの偉大な発見に刺激されて、意図的に人文社会学の方法として導入された。たとえば、イギリスのHumeが人文社会学のNewtonをもって任じ、Smithが大著「諸国民の富」においてNewtonのコスモス的世界を想定し、Benthamが幸福の計

算を意識的に採用したことからも、それは明らかであろう。

Max Weberはさらにそれを徹底せしめようとした。周知のように、彼は、学問研究の基本態度として価値自由性 (Wertfreiheit) を呈示した。これは、探究のプロセスにおける倫理的中立性 (ethical neutrality) であり、これによって彼は科学を価値との結合から救い出そうとした、という。つまり、Weberは、社会科学乃至社会政治学の認識の客観性を確立したかったのである。彼によって、社会科学は、その発展に不可欠な方法的批判的志向を可能にしたことができる。

Wittgensteinは、価値自由性ということの意味をよく了解していたにちがいない。彼は「語りえぬものについては、沈黙しなければならない。」<sup>3)</sup>という。それは、「世界は、論理的空間における事実の総和である。」<sup>4)</sup>「世界は価値を有しない。」<sup>5)</sup>ということから来る。語りうるものは、事実の総和としての世界であって、世界から離れている価値ではない。こうしてWittgensteinは、科学から価値を取り除き、それについて語ることを止めたわけである。だが、彼は、沈黙されるべき価値が人生においていかに重大なものであるかも、それを守ることの尊さをも知っていたのである。

現在では、WeberやWittgensteinが心底にひそかにとどめていたものが、次第に無視さ

れ、否定され、忘れ去られつつあるように見える。世界を分析し、事実の知識を蓄積することだけに意味を見出そうとする方法的一元論が支配力を増してきたからである。世界と人間の営為を知覚・観察される事実と数理に解体する方法的一元論は、諸学の独自性乃至固有性及びそこから導かれる領界をあいまいにする。方法的一元論においては、特定の学問の対象は、学問する者の、同一平面上における関心や興味の相違にすぎない。探究が進められるにつれて、それは他の領界に触れ、やがて同一のものとなる。

今日、学問の進展とはその独自性と領界を失うことである。無反省な方法的一元論は、学問の平板化を進め、学問の衰退を招くであろう。それは教育における学問の権威の失墜である。

学問のなかには、沈黙されるべきもの、いわば人間的価値の探究をその領域から取り除くと、その本質を欠落するようなものがある。純粹論理の学に対置される実践的な学問がそうである。政治学・社会学・教育学・医学・農学などはいずれも、何が望ましいか、いかにあるべきかという価値の問題から離れることはできない。とくに、人間の全体へ関わることを求められている実践的学問であればあるほど、価値の探究を自己の内にもつことを要求される。看護学もそのような実践的学問のひとつであろう。

ところが、方法的一元化の波はあらゆる実践的学問の土台を侵食している。この波は、まだ誕生浅い看護学をも他の有力は自然科学の方法を有した学問の中へ、解体するであろう。

学問が他の学問に呑み込まれ、解体するということは教育にとって悲劇である。教える者も学ぶ者も、方向を定めえず、生気を失ってしまうからだ。従って、教育する者は、学問がまさに自律した学問として成立することを願う。理性のたえざる営為を可能にし、方法的批判的に展開する学問を学ぶ者は幸せというべきである。実践する意欲と希望はそこから培われるにちがいない。教育はそれを不可欠とする。こう考えて、私は、ひとまず、看護学という学問の問題にささやかな想いをめぐらせることにし

た。他の学問ではなく、看護の学に着目したのは外でもない。この学問こそ最も実践的で、しかも危険にさらされている人間の生に密接した学問のひとつだ、と思ったからである。

## I. 現 状

看護するという事実は他の学問の事実対象よりも発生的にははるかに古いものであろう。

幾万年も前の古代原始人の生活にも、すでに看護の事実があるという。看護するということは、哲学的思索とか数計とか法定とかいった人間の諸活動よりも、深い、人間の根源的活動なのである。

しかしながら、看護の学は、他の学問、たとえば、医学・物理学・法学・哲学などの下位にあると見られ、とくに医学に対しては、それに従属するものという見方が強い。この理由には、看護の学が他の諸学に対して立ち遅れていること、即ちその対象も方法も、その目的とするものも定かではないということがあろう。また立ち遅れているのは、様々な歴史的経移、政治社会的な力関係がからみ合っているからであろう。だが、真の理由は、看護するという行為自体の意味及びそれに対する人間の在り方から明らかにされるはずである。

看護するという行為は生きた人間に対する自然的な働きかけである。従って、ここでは、「看護とは生命力の消耗を最少にするよう生活過程をととのえること」<sup>6)</sup>といった抽象的な規定は、意味を欠く。こういう規定は、誰れにでも理解されうるが、それによっては、誰れも実際には行なうことはできないのである。看護とは、体の不自由な人間を看護し、世話することに尽きるのではないか。それは、人間の心身の機能を主として具体化する「手」によって、「手を差し伸べ」「かゆいところに手のとどくように」「手厚く」「手を尽くし」、「手回しよく」「手まめ」に世話することである。それゆえ、逆に、「手をこまぬき」あるいは「手を抜き」、途中で「手はずしたり」「手を引いたり」するのは、看護することを否定するものである。

人間の手ほど精妙なものはない。人間の手は、道具であるのみならず物いわぬ言葉でもあるのだ。看護の主たる働きはこの手によって為される。この精妙な手を代行できるような道具や機械はない。科学技術の発達によって、手の一部が次々と機械によって代行されるとしても、なお看護は手の行きとどいた、あたたかい助けの手を基本とするのである。ということは、看護するという行為は、機械の操作・技術が及び難い、むしろそれを越えた面をもつということである。故に、このことは、看護することが、科学技術の影響を限りなく受けながらも、技術とはなりえないことを意味する。技術は組織的な訓練と科学的知識の教育によって達成されるが、看護は手の経験を中心とするのであって、手ぎわよさ、手さばきなど、手の巧みにたよる手仕事にとどまりやすいのである。

科学技術は近代における人間悟性の発露である。科学は、真理の探究というあの高貴な天才の英知によって、自由な時間において、ときには遊びの要素をもって展開された。これに対して、看護は、余りにも日常に密着した、真面目で気の重い手の労働であったのである。科学における真理の探究を聖なるものとすれば、手の仕事は、前近代的な庶民の俗の世界に帰せられるものである。よく気がつき、親身になって病人や子どもの「手回り」の世話をするという看護が、小手先の仕事であるとして、安易に見なされやすいのは、このような手の俗性によるといえよう。かくして、看護の本性は卑近性あるいは卑劣性<sup>7)</sup>であるといわれる。この本性が看護学の形成・発展に影響しないはずはない。いわば、看護学の創造的発展は人間の手の復権と深く関わっているのである。

科学技術の頭脳に比べると看護の手はささやかな働きである。これは、即時的に相手の手足となり、快を増し苦痛を軽減することに向けられる。診断・治療をするわけではなく、従って、人間の生死に直接関わるような働きを看護はしない。出産証明も死亡診断もまず医師によって為されるのである。

本来、看護するということは、誰れにでも一

応できる手の行為である。それゆえ、これは、生産から離れている女・子どもの仕事とされた。女・子どもにでもできる手の仕事であるというとき、そこには力と知性の乏しい者の行為を軽視する情念が現われている。思想史においても、「人間」の概念を考えると、人びとは意識的にせよ無意識にせよ女・子どもを、そのカテゴリーに含めないのが普通であった。われわれは、子どもの思想史上の定位を Rousseau の天才に待たなければならなかったし、女性においては、現代に至ってもなお確たる定位を実現できないでいる。

「手」の卑近性は、女・子どもの手であるということによってさらに強められる。しかも、看護する手の対象は病人や子どもである。

彼らもまた、生産力を喪失したか未だ生産力をもつに至っていない者たちである。特に、病む人たちのなかで、老人の割合が更に増大するであろうことは高齢化福祉社会の常識である。この場合、憂慮すべきことは、富の生産を第一の価値と見ている現代文明においては、生産力を失った者は「もはや一個の廃品でしかない」<sup>8)</sup> という事実である。現実には、看護の対象である者が、人間としての品位を低下させられているような社会では、看護することの価値も低下させられるであろう。看護することの価値づけは、すべての人間の尊厳性を確認するというヒューマニズムと、深く軌を一にするのである。

看護学は、以上に述べたような、看護することの本性及びそこからくる現実状況によって、その発芽を抑えられてきたといえる。

それでは、看護の学は、このような重荷をかかえながら、学問そのものとして歩みを進めるのであるか。看護の学は学問そのものとして成立する可能性を有しうるのであるか。この問題が解かれねばならない。

看護学といわれる名称が使われだしたのは、日本では戦後ではあるまいか。<sup>9)</sup> ともかくこの名称は新しいものだ。この名称の使用が、いかなる理由・動機によっているかは、ここでは問う必要もないが、おそらく、これは、看護する

ことを学問研究の対象にしたいという試みの表われと解してもよいであろう。

現在、看護学といわれるものは、他の諸学の発展に刺激されて、それを応用するという仕方で成り立っている。その仕方を規定しているものは、いうまでもなく、急速に進歩した近代自然科学である。自然科学は、対象を分析し、機械論的操作をくりかえすことによって、精密な検査・測定を行ない、膨大な量のデータを臨床医学及び看護の領域に提供した。まず、医学は、これによって、心身の疾患の診断と治療・予防に著しい貢献をしたが、同時に自己の内に計り知れないほどの知識をたくわえ、それを看護の領域に流出するのである。こうして、看護の学は、これを受け容れ、応用することによって、看護の効果をあげるように求められる。

看護の学を刺激しているもうひとつの学問分野は、精神・社会科学（たとえば、心理学、社会学、哲学など）である。

これら二類に分けられる諸学が産出した知識と操作技術の方法は、看護するという行為の中にとめどもなく流し込まれ、従って、看護学の領界は膨張する。

ここで問題となるものは、看護学の自己形成とは無関係に諸学の新しい知識が投げ込まれ、それを応用するどころか、その量の洪水に呑み込まれ、本来の方向を看護学が見失うということである。かくして、他の諸学が、程度の差こそはあれ、共通して抱いている危惧が、看護学にも該当する。即ち、それは、看護学の一元化—解体である。

このような状況に際して、看護するという行為の十全な遂行が重要であって、看護学など必要でもないのだとするプラグマティズムもある。しかし、看護学は、看護するという行為とは無縁であって、解体され、他の諸学の中に吸収されてよいのであろうか。これが望ましいかどうかは、看護学の解体によって生れる犠牲者たちを予見すれば明らかであろう。

看護学の解体によって生れる第一の犠牲者は、かつては患者の身内の者が行っていた行為の代行者として、医療施設で働らく看護婦お

よび看護婦になろうとする人びとである。先ず、彼らは、他の諸学によって八方から与えられる知識の小片をつづり合わせねばならないのである。そして、次々と導入される機械技術、激動する医療システムにおいて、看護の焦点はどこにあるのかを、自分で発見せねばならないという途方もない課題を背負いこむのである。たとえば、ここでは、直ちに、技術か人格か、機械か手かといった問題が浮び上る。看護するという行為を徹底して技術化するには、余りにもその行為は多岐にして広い。かといって、現代は、手を尽くして身の廻りを世話するといった古典的な看護行為に徹せられる時代ではない。さらには、看護任務の範囲も問題となろう。診断と治療に専念する医師を援助するために、その任務を果たすことは重要である。だが、他方では、看護婦が、責任をもって自由に裁量できる領分もあろう。医師と患者との間に立たされている看護婦の責任の領界とは何であるのか。いずれにしても、これらの問題を解決する原点は、看護学の成立と関っているのである。

看護教育にたずさわっている教師も、看護学の解体の犠牲となる者である。彼らは、看護の理念、目標、看護の領界、整理された知識を明示しえないまま、教育現場に立たされることになる。教育が、鮮明な価値目標とそれによって統合された知識を呈示しえぬとき、それは、エネルギーを消耗するだけであり、やがて失速する。このことが、教える者の情熱と学ぶ者の意欲を減退させることは明白である。

看護婦と協同して医療に望もうとするヒューマンな医師たちもまた、看護学の解体によって被害をうける人びとであろう。看護婦と同様に、彼らも自己の任務の領界に混乱するであろうからである。しかしながら、最大の犠牲者は、治療・看護する者ではなく、その対象である患者そのものである。彼らこそ、混乱の只中におかれる者だからである。

かくして、看護学は、患者および治療・看護する人びとのために、諸学の知識と技術を自らの視点において、整理・統合しなければならぬという課題を負わされる。もちろん、ねばな

らないということは、できるという前提に立っている。これができるためには、看護学が、まさに看護の学として成立することが不可欠である。看護学は、それが有している様々の問題にも拘らず、学問として成立しうる基盤を有しているにちがいない。

## Ⅱ. 対象の問題

看護の学を確立しようとしている研究者たちは、「看護学の研究対象は看護という社会現象であって、単なる病気などという自然現象だけではない。<sup>10)</sup>」といい、さらには、「看護の対象はたしかに人間である。しかし、看護学の対象は看護そのものであって、人間ではない。<sup>11)</sup>」という。これらの主張を私は正しいと思う。だが、より正確に言えば、「看護すること」が看護学の対象である。看護学はこの対象の意味を明らかにする学問であり、このことから、看護学の内容と方法も導かれるはずである。

看護することの意味を明らかにするためには、ある程度、既にその意味が了解されていなければなるまい。まさに、われわれは、初めから全く知らないものを探究することはできないからだ。

まず、看護学の対象が「看護する」という行為の動詞であることに注目したい。行為することを対象とする学問は、看護学の他には教育学の教育すること、哲学の哲学することといったように、ごく限られた学問しかない。ここからも、看護学が実践と深く関わっている学問であることがうかがえる。

そこで、看護する(nurse)ということばの検討から出発したい。ただし、ことばは、行為の意味内容を表わしているからである。

これには、介抱する、看病する、治療に努める、養生する、大事に育てる、はぐくむ、細心の注意をもって扱う、養成する、たいせつに取扱う、乳を飲ませる、育てる、養う、などがある。<sup>12)</sup>これを見ると、看護するということは、心身の世話、健康の回復への援助、子どもの成育の助成であることがわかる。

看護することにおける心身の世話とは、心身

の自由の欠如を補完することである。従って、看護する者は、病人や子どもの心身の代行者としての役割をもつことになる。つまり、病人や子どもから見れば、看護する者は、自己の身体いわば手足の機能の延長者及びことばの代弁者に他ならないのである。

心身の代行としての看護は、対象となる人びとが、彼らの欲求を自由に表現できるという人間関係によって支えられる。看護するという行為が、従来、主として身内の者に託されてきたという事実は、この人間関係と不可分のものである。

この関係は、医療の近代化が進み、看護する者が、職業人である看護婦にとって代られた現在においても真実である。職業専門家としての看護人は、他人である患者や子どもを、自己の身内の者に対するように心づかい、つねに付きそい、その手足となって世話しなければならないのである。従って、既に述べた看護の卑近性がここでも確認される。即ち、看護するということは、基本的には、為そうと思えば一応誰れにでもできる、ささいで卑近な手の行為なのである。

しかしながら、この行為は、誰れにとっても、心底から行なうことの極めて困難な行為なのである。他者を身内の者に対するように世話し、その生活に奉仕するということは、並々ならぬ優しい心づかいが求められるのであって、それは、高貴な精神がなければかなわぬことだからである。ここに、看護の卑近性は尊厳性であるというパラドックスが成立する。強さが優位を占める世界において、弱い者を、その手足となって世話するということは、まことに人間的な、尊厳ある行為に他ならないのである。

ここからまた、看護する者の最低限のモラルも導かれるであろう。それは、患者との人間関係を損なわないことである。これは、ことばをもって、たとえば、皮肉や軽蔑のことばによって、また、私的な秘密をもらすことによって、患者の人格を傷つけないということに極まる。ことばによる人格の損傷は、看護する者への不信と憎悪を生むからである。人間の関係におい

ては、この意味で、手廻しがよくないとか気がきかぬとかいったことは、二次的な事柄になるのである。

看護することには、心身の健康の回復を援助するということがある。これを可能にするためには、対象者の心身についての客観的理解が必要であることはいうまでもない。これは、自然科学、とりわけ医学の知識を不可欠とする。但し、この知識は、看護するという行為の中で統合されねばならない。それはこういうことである。たとえば、看護する者は、患者の心身の異常・欠陥をよく理解して患者の欲求 (need) に答えよ、といわれる。その場合、欲求に答えるということとは、患者の望みをかなえてやるということでもなければ、生理的要求を直ちにみたすということでもあるまい。それは、主として医学の知識に支えられた事実認識と、人間の全体においてそれがいかにあるべきかという価値判断とを統合させることにおいて、答えられるのである。

従って、看護することにおける健康回復への援助は、診断・治療でもなければその補助を第一義とするものでもない。看護することを診断・治療の補助に尽きるとするならば、看護は、診断と治療の下位におかれ、それに従属するという実情を抜け出せないであろう。また、看護を診断・治療の一分野であるとして、それに同化させようとするならば、看護の自律・専門化にとってはいうまでもなく、看護学の成立にも有害であろう。

今日、看護の研究者たちの或る者は、「看護を科学として証明する看護学の確立<sup>13)</sup>」を求め、「科学的看護論」あるいは「看護科学」の成立を期している。これらは、看護することが、科学＝普遍客観的でなければならないという自明のことを志向しているのか。それとも、さらに具体的に、看護は科学即ち自然科学の方法を用いた技術であり、看護学は自然科学でなければならない、といっているのだろうか。もし、後者が無条件に肯定されるならば、看護は、科学技術とくに医療技術そのものとなり、看護学は、医学の中に解体するという、いわば看護学

の自己疎外を促進することになるろう。

看護することは、事実認識と価値判断に基づく総合行為であり、科学の知識と技術は、その中で意味づけられたときに初めて、健康回復への援助という看護行為に真価を發揮するのである。

成長への助成というのが看護することの第三の意味である。成長とは、未成熟な子どもの到達目標である。子どもにおいては、健康と成長とは同一のものである。従って、看護することにおいては、健康への援助と成長への助成とは深く関わっている。この意味で、「子供の患者、特に乳児は、一般論としての看護学が対象とする患者の原型<sup>14)</sup>」であるとする主張もうなづけるであろう。

成人とちがって子どもは成長する。それゆえ、子どもを看護するということは、子どもの自然・成長可能性を損なうものを排除し、その可能性が具現されるように助成するということである。従って、主体は子どもである。看護する者は、植物を栽培する庭師が丹念にその成育を見守るように子どもの成長を看護するのである。

ところで、近代自然科学は、人間の悟性によって自然を征服するという力の哲学を胸裡に抱いている。自然を対象化して、自己の意志の下に置こうというのが、自然科学の一般的姿勢である。これは、近代医学の姿勢でもある。近代医学における診断と治療は、製作者が自己の意志によって計画・目標を立て、素材・対象を解明し、製品として完成してゆくように、患者を第三人称・対象化し、そのなかから切り取られた部分即ち病理を解明・処置し、出来れば、生理の構造そのものをも、自己の意志の下に置こうとするのである。それゆえ、看護することが栽培型であるのに対して、診断・治療は製作型であるといえよう。もちろん、前者においては主体は病んでいる子どもであるが、後者においては医療者が主体である。但し、これはモデルであって、現実の看護・医療行為にたずさわるすべての人びとが、判然とそれらのいずれかに識別できるというのではない。これは、人びとの行為が、それぞれ二つのモデルに収斂するというの

であって、行為のリァリティーは、むしろ、両極する二つのモデルの莫大な対項の間に存するというべきである。

看護における子どもの成長への助成とは、心身双方への援助であろう。身体は健康になったが、心が歪められたというのでは、看護が行なわれたことにはなるまい。そうであれば、子どもを看護することは、治療・保健のみならず教育をも含むことになる。従って、子どもを看護する者は、教育的態度を要求される。そこでは、晴朗、ユーモア、善意にみちた態度、子どもの可能性に対する信頼、希望、忍耐が求められ、<sup>15)</sup>子どもの手足の代行者としてだけではなく、人格の代理人として立つことが重要となる。

しかしながら、看護において教育活動が意味をもつのは、子どもを対象とした場合に限られる。子どもは、自己認識を欠き、責任を負うことから免かれている存在である。彼らは、大人たちからたえず承認され、励まされなければ生きて行けない人間なのである。これに対して、大人は、課題の意志的達成、責任をとること、自己確認、のできる人間である。従って彼らは、教えられることを望んでも、教育されることを望んではいない。看護する者は、すでに大人になっている者を教育することはできないのである。看護することのなかには、つねに教育活動が含まれているとするのは、教育概念の不当な拡大であろう。

看護学の対象を定めながら、すでにその内容については、若干触れたように私は思う。即ち、看護学の対象は「看護すること」であり、その内容は以上の三つに集約できるものである。従って、看護学の課題は、その対象の意味を解明し、さらに、それを成立させる条件を提出することである。このためには、これを可能にする方法が必要である。それゆえ、私は、続いて、学問を成立させるもうひとつの問題、即ち、方法の問題に言及しないわけにはゆかない。

## Ⅱ. 方法の問題

学問の方法もまたその対象の意味内容をかいま見ることから明らかになる。対象が方法を導き出

し、方法が対象を明らかにするというのは論理的矛盾であろうが、これは、理性の弁証法というべきであろう。

看護するということは、医療や教育と同様に、「ある」で示される事実認識と「べきである」で表わされる価値判断を要求される。それゆえ、看護することは二様の命題をもつ。

彼は胃潰瘍を患っている。(事実命題)

あらゆる治療が施されたが完治しない。(事実命題)

それは彼が酒を飲むからである。(事実命題)

彼は酒をやめるべきである。(価値命題)

結論である価値一規範命題は事実命題から導かれたのではない。これは、経験的な知性乃至常識的な知恵から導かれたものである。しかし、より複雑な問題になれば、これには倫理学の助けを借りねばならない。たとえば、たえず論争を起こしている安楽死、心臓移植、遺伝工学、の問題などはそうであり、これらは、医療と看護にとって避けることのできないテーマである。

かく見ると、看護学は事実と価値規範を両極とする学問であるといえよう。かつて、教育学の成立を試みた Herbart が、その目的と方法は倫理学と心理学に依存する、としたことは広く知られるところである。彼によれば、教育の目的は、いかにあるべきかという価値の問題であり、それは、倫理学の探究を待たねばならないのだ。また、いかにあるかという事実の問題は、心理学が明らかにすると考えるのである。看護学も、このように見れば、倫理学と医学とに依存する応用的学問ということができよう。

しかし、これが正鵠を得ているかどうかは、「看護すること」の意味が、倫理学と医学とによって解明し尽くされるかどうかに関わっている。たしかに、看護するということは、最少の意味において、実用目的にかなうものでなければならぬ。従って、看護することには、最低限のモラルと医療の知識とが求められる。この点で、看護することには、倫理学と医学とが不可欠であり、それゆえ、看護学も、倫理学と医学とを方法として用いなければならないのである。



しかし、看護するということは人間の全体的行為であり、従って、それを対象とする看護学は、状況に依存する実践志向的学問である。状況とは、Langeveld がいうように、「人がその中で行動しなければならない人間の諸経験の複合体<sup>16)</sup>」であるといつてよいであろう。それゆえ、看護することを解明するには、倫理学と医学だけでは十分ではない。これには、医学以外の自然科学、社会科学、精神科学が用いられねばならない。看護学が総合学といわれる所以がここにある。

学問が他の学問と接触し、相互に相手の方法を用いて自己の探究領域を解明して行くことは、現代の学問の必然的趨勢である。看護の領域も、逆に、看護学が方法としている医学や倫理学、社会学、心理学などの特殊な探究領域になりうるのである。即ち、医学の一領域としての看護、倫理学の対象としての看護といったように、各学問は、看護することを自己の学問領域に吸収することができるのである。

このことは、阻止されるべきものではなく、むしろ望ましいことである。だが、これが望ましいといえるのは、学問が相互に自己の内に核を有し、求心力を失わないかぎりにおいてである。そのためには、自己の対象と方法をつねに探究する努力を怠ってはなるまい。さもなければ、ある学問は他の学問の中へ解体され、学問の一元化が進むであろう。とくに、実践志向的な学問である看護学には、つねにその危険性があることを、私は指摘してきた。ここでは、諸学の方法が無反省に用いられ、安易に「看護」の下に「学」という名称が加えられるにすぎない状態が進行する。

たとえば、看護学が、基礎看護学（看護総論、看護心理学、看護社会学）、臨床看護学（対症看護学、看護技術、看護機械学）、看護管理学、助産看護学、保健衛生看護学、の五部門に分類されているのを私は見た。<sup>17)</sup>これを分類する基準は複数である。ひとつは、看護の基礎理論と応用実践との対比であり、これは、看護教育をねらいとしたものであろう。もうひとつの基準は、看護行為が実際に行なわれるときの働きの

性質および看護を可能にする組織的条件である。これらの、統一を欠いた基準によって特殊な看護学が羅列してあるので、看護学とはいったい如何なるものであるかが、何ひとつ明らかにされてはいない。ここでいわれるように、基礎の看護学というものが成立しうるのか。臨床看護学とは、臨床医学の一分野としての看護の学であるのか、それとも、看護学の一分野としての臨床の学であるのか。もし、後者を指すのであれば、臨床看護学ではなく、看護臨床学と呼ぶ方が正しいであろう、いずれにしても、こういった疑問がたえないのが、現在の看護学の状態である。

看護学が、「学」という名称を付け足しただけの、煩瑣な知識の寄せ集めに堕さないためには、看護学の自己認識が必須である。これには、二つの努力が求められる。第一は、看護学の対象は「看護すること」にあり、それを解明し、その働きを十全にするために、諸学の方法、即ち、自然科学、社会科学、精神科学の方法を用いるということである。その結果、看護学は、事実の学と価値の学との総合学として成立するであろう。第二は、看護学の成立にとって、最も困難なテーマであるが、諸学の研究方法によって得た成果を求心し、統合する方法、つまり、看護することの意味を全体として明らかにする方法が探究されねばならない。これは、看護学が解体するのを克服する究極の方法なのである。おそらく、看護するという人間の根源的かつ全人的行為は、人間学的方法によって解明されるほかはないであろう。

## 結 び

看護学は、看護するということはどういう意味であるか、そこでは、看護される者に何が起こるのか、それを可能にする方法乃至条件はいかなるものか、を探究する学問である。この探究の方法は、看護することが人間の全体的行為であるので、人間の在り方から導かれる。かつて、Spranger や Flitner が用いたような、人間は自然的・文化歴史的、かつ知的精神的存在であるという規定を承認するならば、看護学の

方法も、必然的に、この規定から導かれるであろう。即ち、この三つの方法から看護の諸学が成立する。具体的には自然科学の方法とりわけ医学に取り入れられた方法は、看護医学、たとえば、看護外科医学、看護内科医学、看護婦人医学、看護成人医学、看護小児医学、看護保健衛生医学、看護病理医学、看護生理医学を発展させ、さらには、看護工学、看護技術学、看護建築学、などを産出するであろう。社会科学の方法によっては、看護心理学、看護社会学、看護歴史学、看護法学、看護教育学、看護人類学などが成立するであろう。もちろん、看護教育学とは、看護教育の教育学ではなくして、看護することにおける子どもとの教育的関係を、教育学の方法で明らかにする学問である。また、精神科学の方法は、看護倫理学、看護哲学、看護宗教学等を成立させよう。

各々の学問が同一の対象を共通な方法で探究することは可能である。看護学の場合もそうであって、その点で、看護学は他の学問と協同研究をすることもできるのである。しかし、その場合、くりかえして言うように、看護学は、他の学問研究と区別されうる原理をもたねばなるまい。拡散し、自己から遠のき、他の学問領域へ逃亡しそうな対象を、自己の内にとどめ、その中心へ収斂させる原点を、あらゆる他の学問と同様、看護学は不可欠とする。その原点となるものは、既に述べたように、看護することの意味解明から導かれるのである。

この方法は、現象学的人間学の方法であろう。というのは、看護学は、医学や教育学のように、状況のなかで起こる人間の行為を取り扱わねばならないからである。看護学は、純粋学たとえば論理学や数学の完全性、あるいは、自然科学の「再現可能性」を研究の基本概念とはしない。看護学が直面するのは、くりかえしのきかない、まさに時とともに流れ去って行く、複雑にして不透明な状況なのである。この状況行為を解明する方法は、現象学的人間学より他はないであろう。かくして、看護学は、一般基礎学としての看護人間学および特殊応用学としての、諸学の方法を用いた看護諸学より成立する。

看護することは、実際の要求に答えること、とくに、個々の生命の危機に際しては、その救助に尽力することを第一義とするものである。この厳正な事実が、医学の知識と技術および最低限度のモラルを必須とする。従って、看護する者の養成には、医学と倫理学とを中心にしてカリキュラムが組まれることになる。あるいは、実地のさらなる要求から、看護基礎学、看護臨床学、看護助産学、看護管理学などが採択されたりすることになる。

このように、実地の要求からくる看護機能、それを育成するための教育目標や方法が選ばれ、それに基いて、看護学の諸構成学が、カリキュラムの中に組込まれるのは正しい。だが、教育における看護学科の構成学と看護学の構成学とは同一視されてはならない。前者は、教育上の問題であり、後者は厳密な方法によって成立すべき学問の問題であって、両者は、相互に関連しながらも、距離を有するのである。

看護学が実践的な学問であるというのは、看護学が、状況の中での行為を解明する学問であるからで、それを、直ちに、実地に役立つという意味にとってはならないのである。実地に役立つことをのみ看護学に要求するならば、それは、看護学の視野狭窄化、自壊以外の何ものでもない。いうまでもなく、真の学問は、便利や効果を直接求めるのではなく、実地の端的要求とは一步隔ったところで、対象を眺め、それを可能にする条件を探究し、同時に自己自身をも批判しながら、永続的に、実地へ影響力を行使するものである。このことが、広く、深い意味で、看護する者と教育する者の在り方を支えるのである。この意味では、看護教育は、看護学と実地の要求とのポラリテートとして成立するといえるし、あるいは、三者は、三角形のそれぞれの頂点であるともいえる。

従って、看護学の自己形成が進めば進むほど、教育する者や看護する者が豊かに刺激されることは明白である。探究と行為とがいかにか結びつくかという Socrates 以来の問いがあるとしても、看護することの意味とその実現可能な条件を探究し、かつ、それを学ぶ者が、相互に影響

しないはずはないからである。

ところで私は、副題に示したように、看護の学を中心に教育と学問に関する問題を論じてきた。しかし、看護学において提示されたような問題は、看護学だけに限られたものではない。程度の差こそはあれ、他の学問もまた、共通な危機の中にあり、解体の危険にさらされているのである。その意味で、現在は、学問すること自体が問わねばならない時代なのである。看護学の問題は、その一環として触れられたにすぎない。

#### 付 記

本論文の執筆にあたり、本学部教官・大津みき氏には、看護の分野における参考文献を提供いただいたうえ、その内容にわたって親切な説明をうけた。ここに、感謝の意をこめて、厚く御礼申し上げます。

#### 文 献

- 1) 市井三郎：現代史と価値理念・覚え書き、岩波書店「思想」P.145, 1970, 2月号
- 2) The Dissenting Academy; Edited by Theodore Roszak, Pantheon Books Division, Random House, New York, 1967, 城戸明子他訳「何のための学問」みすず書房, 1974
- 3) Wittgenstein, L.: Tractatus Logico-Philosophicus, 1921, 藤本隆志・坂井秀寿訳「論理哲学論考」法政大学出版局, P.200, 1968
- 4) Ibid, P. 61
- 5) Ibid, P. 195
- 6) 薄井担子：「科学的看護論」日本看護協会出版, P. 24, 1974
- 7) 岩田啓靖：『油断なき生』としての看護, 総合看護：P. 58, 1975, 4月号
- 8) Simone de Beauvoir : La Vieillesse, Éditions Gallimard, 1970 (朝吹三吉訳「老い」人文書院, P. 12, 1972)
- 9) 私が知る限りでは、安藤義松「看護学」(昭和22) グレース・オルン著, 太田千鶴夫訳「伝染性疾患看護学」(昭和23)を見るにすぎない。
- 10) 芝田不二男：「看護哲学」メヂカルフレンド社, P.164, 昭和51
- 11) 薄井担子：「科学的看護論」日本看護協会出版, P.175, 1974
- 12) Shogakukan Random House English Japanese Dictionary, Vol. 111, P.236, 昭和49
- 13) 氏家幸子：基礎的看護技術に関する試論, 大阪大学医療技術短期大学部研究紀要, 自然科学・医療科学篇 第2輯, P.11
- 14) 小林登：看護とは, 「看護教育」Vol.15 No.1, P.29, 1974
- 15) Bollnow, F.: Die Pädagogische Atmosphäre, Untersuchungen über die Gefühlsmässigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung, 森昭訳「教育を支えるもの」黎明書房, P.136~166, 昭和44
- 16) Langeveld, M. J.: Education and Sociology, In: International Review of Education, IV, 1958, 和田修二監訳「教育の理論と現実」未来社, P.137, 1972
- 17) 森日出男：「文献からみた看護研究の動向と分析」医学出書院, P.32, 1969